

<b>Title</b>	「スピリチュアルケアと宗教・哲学・心理学」報告（2014年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催：2014年度 第3回スピリチュアルケア研究会）
<b>Author(s)</b>	佐治, 由美子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :28-29
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5246">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5246</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 2014年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 2014年度 第3回スピリチュアルケア研究会 「スピリチュアルケアと宗教・哲学・心理学」報告

11月24日、紅葉に彩られた聖学院大学上尾キャンパスの4号館4階第一会議室において、スピリチュアルケア研究会の今年度第3回が開催された。参加者は8名で、グリーフケアにかかわる牧師や医師など臨床体験を積んでこられた方々、そしてスピリチュアルケアを学ぶ学部生・大学院生を含む研究者が同席し、互いの話を聴き合い共に考え合う貴重な時間もたれた。

協議に先立ち、30分ほどの発題が行われた。聖学院大学教授でありスピリチュアルケア研究室長でもある窪寺俊之先生による発題であり、そのテーマは「スピリチュアルケアと宗教・哲学・心理学」であった。以下その概要について記す。

スピリチュアルケア(霊的配慮)の本質を探る上で重要となるのは、それが現場からの研究として始まったという点だと最初に述べられた。シシリー・ソンドースによって始められたホスピス運動も、キューブラー・ロスの死の研究も、臨床から死を捉え直すことだった。

また、スピリチュアルケアの定義について考えるための資料として、University of Maryland Medical Centerの“What is Spiritual Care ? ”\*が引用された。そこには、霊的必要を求める人の究極の問いが10通り示されている。

- ・ どうして私にこんなことが起きるのか
- ・ これって何なの
- ・ どう理解したらいいのか
- ・ 私の人生をどう受け止めたらいいのか
- ・ どこに慰めや希望があるのか
- ・ 何がよくて、何が悪いのか、分からない
- ・ 何に感謝したらいいのか
- ・ 何を(誰を)信じたらいいのか
- ・ 私の愛していたものとか私を愛してくれていたものって、何だったのか
- ・ 私の信じているものや信じていた人は、本当に

私の人生で大切だったのか

これらの人生の重大問題は、宗教的、あるいは哲学的、あるいは心理的な側面を含んでいるとし、発題者は、一つひとつの問いについてこの三つのカテゴリーをあてはめた上で、このようなカテゴリーで十分に問題解決ができるのか、スピリチュアルニーズを包括できるのか、と参加者に投げかけられた。



上段：窪寺俊之教授（発題者）

そしてさらに、この三つのカテゴリー(宗教・哲学・心理)でスピリチュアルケアが成り立っているとしたら、それぞれのカテゴリーは人間のどのような能力に働きかけているのかという問いの下に、以下のような分類がなされた。

- 宗教→人間のもつ悟性、信性
- 哲学→人間のもつ知性、理性
- 心理学→人間のもつ感情、情緒

このような観点は、スピリチュアルケアにおいて未だ整理されているとは言いが、これから整理され明らかにされた暁には、スピリチュアルケアの方法と目標が語られることになるだろう、という展望として次のように述べられた。

スピリチュアルケアの方法と目標を一つに重ねてみると、「スピリチュアルケアは、どのような方

法で、患者の中に何が起きることを期待しているのか(傍線は報告者による)」という問いが生まれるとして、それぞれのカテゴリーから生み出される方法と目標の可能性を発題者は示された。

宗教…紹介・招き 方法⇒ 悟り・信じる 目標

哲学…納得できる説明 方法⇒ 生き方変容 目標

心理…聴く・寄り添い 方法⇒ 気付き・洞察 目標

以上の発題内容を受け、後半は協議の時間がもたれた。以下の内容が、その概要である。

まずスピリチュアルケアの領域がどこに位置するのかという問いについて、三つのカテゴリー内に収まるのか、これらのカテゴリーからは独立した何か独自の領域をもっているのではないか、という意見が出され、三つのカテゴリーでは捉えきれない領域をスピリチュアルケアと名付けることになるのか、といった議論に進んでいった。

しかし、その一方で、スピリチュアルケアを概念化し理論化することが可能か、との意見も出され、スピリチュアルケアが宗教との連続性をもっているとしたら、言葉で伝わる部分だけでなく言葉を用いないで伝わる部分も大切にしたい、という意見が述べられた。また、患者とのふれ合いにおいても、言葉を超えて相手との間に生まれる何かが必要になる場合もあるし、子どもたちの生きる世界においても、言葉を超えて分かり合える関係が生まれることがある。このような意見を受け、発題者は、スピリチュアリティは人間が生得的にもっているものである、とまとめられた。

協議の後半は、スピリチュアルケアの方法として提示された心理学(カウンセリング)的傾聴をめぐっての議論が深まっていった。

生きる意味を見失いそうな人たちの分かち合いの中にスピリチュアルな気付きの瞬間が訪れることがあるとの報告から、傾聴の意味において一対一のいわゆるカウンセリングとどのような違いがあるのか、またひたすら聴くだけでなく何らかのカリキュラムがその方法の中にあるのか、などの

問いが提示された。苦悩の中にある大人だけでなく、子ども同士でも交わりによる癒やしがあるとしたら、癒やしそのものにも多様なケースがあることになる。そのことを想定すると、限定的な方法よりも事例の引き出しをたくさん持っている専門家になることが大事ではないか、という意見も出され、発題者より、知識を持ちながら無の状態に立てるのが専門家だろうと補足がなされた。

子どもとの関わりにおいても寄り添うことが重視されるが、そこに居合わせることを通して子どもの側に何かが起こり、子ども自身が世界を開いていくことになっていく。そこに専門家としての無の状態が働いているのであり、それをつくり出しているのが保育者自身の引き出し、つまりそれは記録を残していることであることを、報告者は保育学の立場から述べさせていただいた。

議論はオープンエンドで終了したが、発題者が最後に、スピリチュアルケアをもう一度現場から組み立てたいと述べられたことが今も印象に深い。



質疑応答風景

※出典：Source: What is Spiritual Care? | University of Maryland Medical Center  
<http://umm.edu/patients/pastoral/what-is-spiritual-care#ixzz3 FxiheW 2 V>

(文責：佐治由美子 [さじ・ゆみこ] 聖学院大学人間福祉学部児童学科特任講師)